

症 例

下顎切歯部過剰歯の2例

田 中 実 轟 朝 五 田 中 秀 穂

信州大学医学部解剖学第2教室

SUPERNUMERARY TEETH IN THE LOWER INCISORS AREA : REPORT OF TWO CASES

Minoru TANAKA, Tomokazu TODOROKI and Hideho TANAKA

Department of Anatomy, Faculty of Medicine,
Shinshu University

TANAKA, M., TODOROKI, T. and TANAKA, H. *Supernumerary teeth in the lower incisor area : Report of two cases.* Shinshu Med. J., 27 : 555-560, 1979

Supernumerary teeth in the lower incisor area were found in two females (Tables 1-2).

In Case 1, two incisors appeared in the lower right central incisor area. It was difficult, however, to determine which was the supernumerary tooth or normal one (Figs. 1-3).

In Case 2, the right lateral incisor was fused with a supernumerary tooth. The surface of the crown in this tooth had a vertical bucco-lingual groove. Its mesio-distal diameter was evidently large (Figs. 4-6). The pulp cavity at the crown was divided. The crown width and thickness of the teeth in the upper and lower jaw opposite to the side of the supernumerary teeth showed larger value as compared with the average value in Japanese (Figs. 7-8, Table 3).

(Received for publication ; May 17, 1979)

Key words : 過剰歯 (supernumerary teeth)
双生歯 (geminated tooth)
下顎切歯 (lower incisor)

岡本ら(1963)¹⁾によると外来患者81,231名中、過剰歯を有するものは466例503歯あったが、そのうち下顎切歯部に過剰歯を有するものは3例3歯のみであり、全過剰歯の0.7%弱にすぎない。Stafne(1932)²⁾の統計では下顎切歯部における過剰歯は全過剰歯の2%であり、岡本らのものよりやや高率である。しかし、いずれにしても下顎切歯部に過剰歯の出現する頻度は極めて低く、酒井(1969)³⁾によると数万人に1人位の割合であろうという。

さらにその過剰切歯が隣在歯と癒合し、いわゆる双生歯の形で出現する頻度については、まだ正確な統計はないものの、極めて稀な症例のようである。本邦ではこれまでに福島(1937)⁴⁾、平野・吉田(1937)⁵⁾、

吉岡(1941)⁶⁾、吉岡・大竹(1944)⁷⁾、ならびに相田(1958)⁸⁾が、それぞれ下顎切歯部における双生歯の1例を報告しているに過ぎない。

われわれは、下顎切歯部においてほぼ正常切歯の形態を示す過剰歯をもつ1例と、下顎側切歯と過剰歯との癒合歯、すなわち双生歯の1例とを経験したので報告する。

症 例

症例 1

西〇〇子、女、13才2ヶ月、松本市にて出生。家族は両親及び姉1人。遺伝的關係は家系調査をしていないので不明。生来健康で既往症として特に記載するこ

とはない。本人の発育、栄養は普通で、歯の発育状態は良好、歯肉に病変を認めず、口腔内の清掃は良好である。

萌出歯は

$\frac{M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1}{M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1^* I_1} \mid \frac{I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2}{I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2}$

であり、X線診査で $\frac{M_3 M_2}{M_3} \mid \frac{M_3}{M_3}$ の埋伏が認められる。歯列は下顎左側第2小臼歯が舌側に転位していることと、問題の下顎切歯部を除いてはほぼ正常である (Fig. 1)。

下顎右中切歯部の2本の歯は、そのいずれが過剰歯で、いずれが正常歯かを定め得ないので、近心のものを $\overline{I_1}$ 、遠心のものを $\overline{I_1^*}$ とした。 $\overline{I_1}$ は歯列上にあ

り、 $\overline{I_1^*}$ はやや捻転し唇側に転位している。歯冠形態は切歯形であるが、 $\overline{I_1^*}$ の切縁隅角がやや丸みを帯びている (Figs. 1B, 2)。

X線診査による2本の歯の歯根の発育状態は良好で同程度である (Fig. 3)。

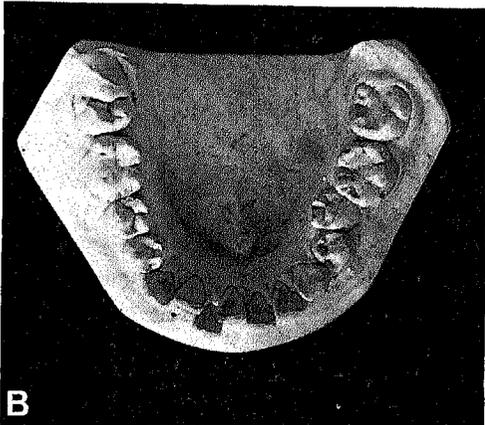
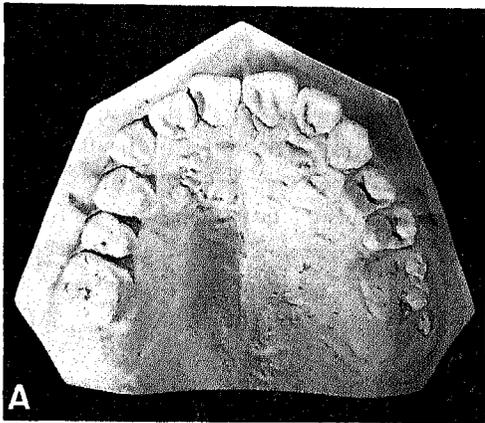


Fig. 1. Occlusal view of the upper and lower dental arches in Case 1.
A : Upper dental arch.
B : Lower dental arch.

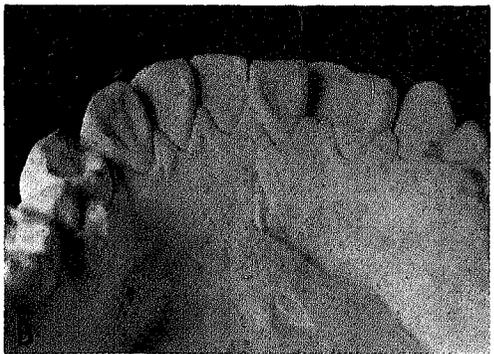
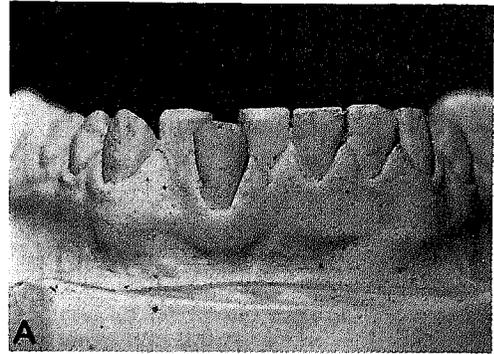


Fig. 2. Supernumerary tooth of lower right central incisor area in Case 1.
A : Labial side view.
B : Lingual side view.



Fig. 3. Radiograph of the lower incisors in Case 1.

Table 1. Crown width and thickness of lower incisors in Case 1 (mm).

	$\overline{I_2}$	$\overline{I_1^*}$	$\overline{I_1}$	$\overline{I_1}$	$\overline{I_2}$
Crown width	5.45	5.20	5.15	5.20	5.45
Crown thickness	6.35	5.95	5.70	5.75	6.45

下顎における各切歯の歯冠の大きさは Table 1 のとおりであり、近遠心径では $\overline{I_1} = \overline{I_1^*} > \overline{I_1}$ であり、頬舌径では $\overline{I_1^*} > \overline{I_1} > \overline{I_1}$ となっている。なお、歯の計測基準は藤田 (1949)⁹⁾の方法にしたがい、計測器具は1/20mm副尺付ノギスを使用した。

症例 2

白〇〇代、女、12才4ヶ月、松本市にて出生。家族

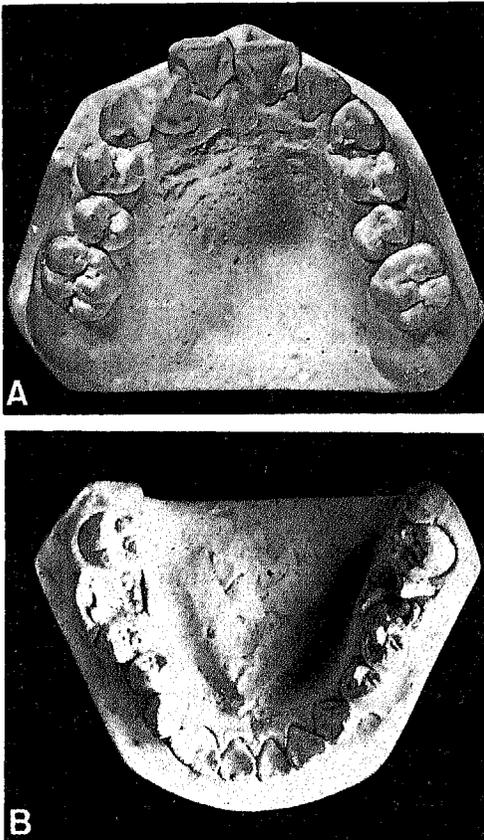


Fig. 4. Occlusal view of the upper and lower dental arches in Case 2.
A : Upper dental arch.
B : Lower dental arch.

は両親および姉兄各1人で、遺伝的關係は家系調査をしていないので不明。生来健康で既往症として特に記載することはない。本人の発育、栄養は普通であるが、口腔内清掃やや不良、歯石、歯垢沈着があり、齶蝕、残根がみられる。

現存する萌出歯は

$\frac{M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1}{M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2^* I_1} | \frac{I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1}{I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2}$ であり、 $\frac{M_1}{M_1} | \frac{M_2}{M_2}$ は残根状態、X線診査で

$\frac{M_3}{M_3} | \frac{M_3}{M_3}$ の埋伏を認め得るが、 $\frac{M_3}{M_3} | \frac{M_3}{M_3}$ の埋伏は認められない。歯列は下顎右側第1小臼歯、上顎右側の側切歯、左右第2小臼歯が舌側転位している (Fig. 4)。

下顎右側では側切歯と過剰歯が癒合して、いわゆる双生歯になっている ($\overline{I_2^*}$)。その歯冠形態は、歯冠の癒合を示す切縁切痕、唇舌側面に縦溝を有し、歯冠近遠心径も著しく大きい (Figs. 4B, 5, Table 2)。

X線診査による歯根歯髓の状態は完全に癒合して1

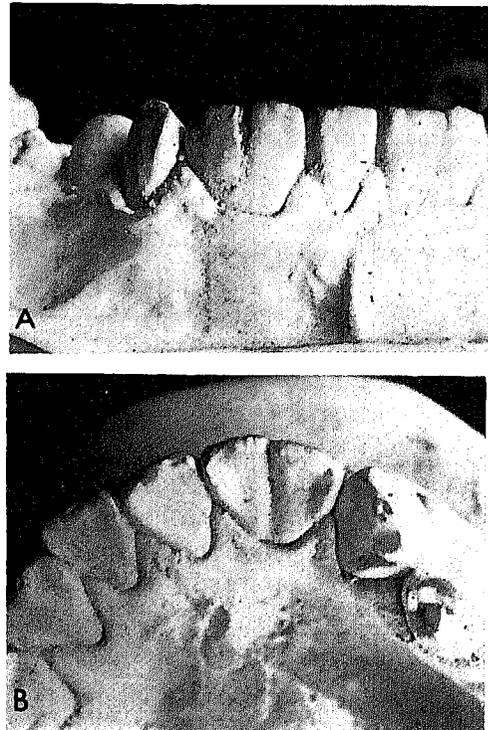


Fig. 5. Fusion of lateral right incisor with supernumerary tooth in Case 2.
A : Labial side view.
B : Lingual side view.

Table 2. Crown width and thickness of lower incisors in Case 2 (mm).

	I ₂ *	I ₁	I ₁	I ₂
Crown width	10.40	6.50	6.45	7.25
Crown thickness	6.45	6.55	6.40	6.40

根管であり、歯冠歯髄は2つに分岐している (Fig. 6)。

考 察

Table 3 はこの2症例について、下顎過剰歯出現側とは反対の側にある歯の歯冠の大きさを、権田



Fig. 6. Radiograph of the lower incisors in Case 2.

Table 3. Crown width and thickness of the teeth in the upper jaw and lower jaw.

		Case 1	Case 2	Japanese female \bar{x} *	Standard deviation**	
Crown width	Upper jaw	I ₁	8.45	10.05	8.55	0.503
		I ₂	7.40	8.20	7.05	0.533
		C	7.60	8.85	7.71	0.488
		P ₁	7.50	7.90	7.37	0.437
		P ₂	6.80	7.45	6.94	0.406
		M ₁	10.35	11.95	10.47	0.541
		M ₂	/	/	9.74	0.613
	Lower jaw	I ₁	5.20	6.45	5.47	0.335
		I ₂	5.45	7.25	6.11	0.370
		C	6.60	7.80	6.68	0.386
		P ₁	7.00	7.60	7.15	0.451
		P ₂	7.15	8.00	7.29	0.472
		M ₁	11.40	/	11.32	0.547
		M ₂	/	11.80	10.89	0.673
Crown thickness	Upper jaw	I ₁	7.20	7.45	7.28	0.447
		I ₂	6.35	7.00	6.51	0.433
		C	8.00	8.50	8.13	0.527
		P ₁	9.50	10.05	9.43	0.588
		P ₂	8.80	9.95	9.23	0.561
		M ₁	10.30	12.45	11.40	0.513
		M ₂	/	/	/	0.649
	Lower jaw	I ₁	5.75	6.40	5.77	0.366
		I ₂	6.45	6.40	6.30	0.365
		C	7.20	7.65	7.50	0.442
		P ₁	7.95	8.35	7.77	0.442
		P ₂	8.80	8.35	8.26	0.509
		M ₁	11.10	/	10.55	0.498
		M ₂	10.75	11.55	10.20	0.560

* Mean value by K. Gonda (1959)¹⁰.

** Average of male and female by K. Gonda (1959)¹⁰ (mm).

(1959)¹⁰⁾の日本人の標準値と比較して示したものである。また、Fig.7およびFig.8は権田(1959)¹⁰⁾の値を基準にした関係偏差折線図である。

症例1では、歯冠近遠心径および頬舌径の大きさが $\pm 2\sigma$ の限界線を超えているのは、上顎第1大臼歯の頬舌径だけで、その他には日本人の標準値と比較して差が認められない。

症例2では、上下顎の歯冠近遠心径および頬舌径の大きさが、日本人の標準値と比較して、すべての歯種にわたって大きく、特に上顎では中切歯、側切歯、犬歯、第1大臼歯の近遠心径、第1大臼歯の頬舌径が、また下顎では、側切歯、犬歯の近遠心径、第2大臼歯の頬舌径が $+2\sigma$ の限界線を超えて明らかに大きい。

Hanihara et al. (1965)¹¹⁾は過剰歯を有する個体における過剰歯以外の他の歯種の歯冠の大きさを、正常個体の歯冠の大きさと比べても、殆んど差がなかったと述べている。しかしながら、今回報告の症例2では、歯冠の大きさが正常個体の場合より明らかに大きかった。

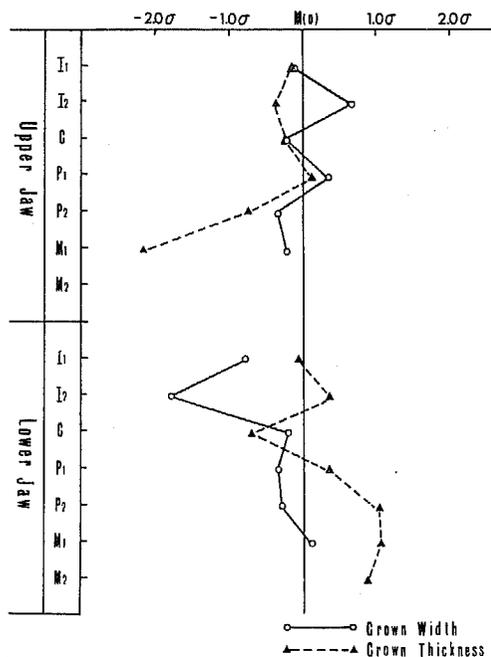


Fig. 7. Relative deviation of crown diameters (Case 1).

* Standard : by K. Gonda, 1959.

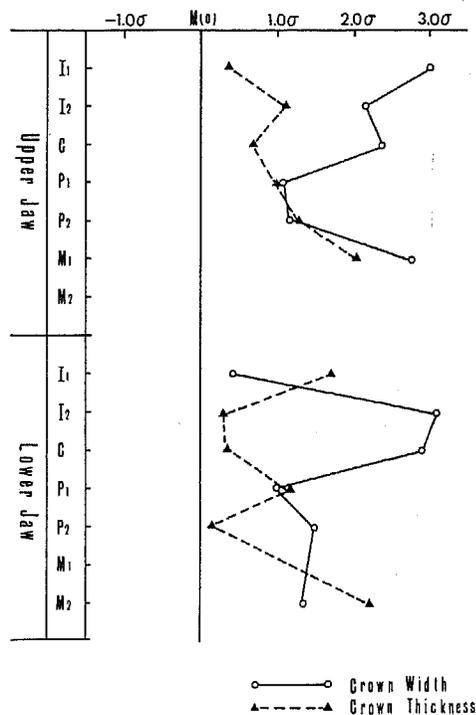


Fig. 8. Relative deviation of crown diameters (Case 2).

* Standard : by K. Gonda, 1959.

まとめ

下顎切歯部過剰歯の2例を報告した。2例とも女性で、1例は下顎右中切歯部に過剰歯を有する症例で、歯冠の大きさ、形態が中切歯に類似しており、いずれが過剰歯で、いずれが正常歯か判別し得ない。

他の1例は、下顎右、側切歯と過剰歯が癒合して、いわゆる双生歯となっているものである。その歯冠形態は、癒合を示す切縁切痕、歯冠唇舌側面に縦溝が見られ、歯冠近遠心径も著しく大きい。

下顎切歯部過剰歯以外の歯冠の大きさは、日本人の標準値(権田, 1959)¹⁰⁾と比較して、症例1では差を認めなかったが、症例2では、その値が明らかに大きい傾向が認められた。

この論文をまとめるに当たり、終始懇篤な御指導ならびに御協力を賜った当教室の故鈴木 誠教授、酒井琢朗教授(現愛知学院大学歯学部)、志水 義房教授、半田康延助教授、西沢寿晃助手に厚く御礼申し上げる。

文 献

- 1) 岡本 治, 斎藤光正, 今井 悟, 藤川政男, 秋庭美津男, 岸田 実: 下顎における過剰歯16症例について. 歯報, 63: 552-558, 1963
- 2) Stafne, E. C.: Supernumerary teeth. Dent. Cosmos, 74: 653-659, 1932
- 3) 酒井琢朗: 過剰歯の好発部位. デンタルミラー, 9: 15-18, 1969
- 4) 福島玄一: 下顎前歯部に発生せる過剰歯の症例. 日歯医学会誌, 86: 249-254, 1937
- 5) 平野賢二, 吉田建士: 人類歯牙異常に関する臨床的観察, 下顎前歯部に於ける興味ある癒合歯に就て. 日歯会誌, 30: 35-38, 1937
- 6) 吉岡玄一: 下顎に発見せる稀有なる癒合過剰歯の1例. 臨床歯科, 13: 1392-1397, 1941
- 7) 吉岡敏雄, 大竹 上: 人類永久歯列の切歯部に現れた癒合歯例に就て. 日口腔会誌, 37: 1-11, 1944
- 8) 相田孝信: 下顎永久歯列に現われた双生歯の1例. 日歯評論, 192: 7-8, 1958
- 9) 藤田恒太郎: 歯の計測基準について. 人類誌, 61: 27-32, 1949
- 10) 権田和良: 歯の大きさの性差について. 人類誌, 67: 151-163, 1959
- 11) Hanihara, K., Masuda, T. and Tanaka, T.: Evolutional significance of reduced and supernumerary teeth in the dentition. J. Anthropol. Soc. Nippon, 73: 72-81, 1965

(54. 5. 17 受稿)